

『柳田国男の歴史社会学 続・読書空間の近代』

矢野 敬一

一 はじめに

本書『柳田国男の歴史社会学 続・読書空間の近代』の著者、佐藤健二を紹介するある一文を引用したい。

「読む」ことの可能性をひたすら信じ、
てみる姿勢の潔さの向こう側に、誰よりも
も獐猛な読者の顔がほの見える。柳田
田国男も、今和次郎も、この人にとつ
ては素材に過ぎない。が、その鋭いな
「読み」の包丁によってさばかれた素材
は、秘めたそのあらゆる可能性を露わ
にする。

的確な紹介文として、うなずける。だ
が、これは近年のものではない。出典を明
らかにしよう。今を去ることざっと四半世

紀前、一九八九年四月に赤松啓介を招いて
開催されたシンポジウムのパネリストとし
て著者が登壇するにあたって、当日配布さ
れたパンフに記載されたものなのだ。著者
最初の単著『読書空間の近代 方法として
の柳田国男』（以下、副題略）が一九八七
年に上梓されて、まだ一年半ほどの時点の
ことである。

そう、著者のよって立つ立場には現在に
至るまでの間、一点のぶれもない。ただし
この間の歳月は佐藤をよりいっそう「獐猛
な読者」たらしめたとはい添えよう。本書
のサブタイトル「続・読書空間の近代」は
その意味で、『読書空間の近代』から始ま
る、方法としての柳田国男をめぐる思索
の、一つの到達点というべき位置づけにあ
る。それゆえ本書は一九八〇年代半ばから

の「民俗学の刷新運動」「飯倉 二〇一三
九二」という補助線を引いて、読み解かれ
うる性格をも帯びている。飯倉はこの運動
に対して「結果的に挫折する」と述べてい
るが、それに半ば以上同意しつつも完全に
肯んずることができないのは、たとえば佐
藤健二の仕事の存在による。柳田国男の読
みの可能性を刷新したことも、この運動の
忘れてはならない成果だと考えるからだ。

二 本書の構成

「プロローグ 再び「柳田国男の古い」
をめぐって」から始まる本書は、全体で六
章の構成をとる。

プロローグに「再び」とあるように、こ
こで一気に本書はおよそ四半世紀前に刊行
された『読書空間の近代』へと、リンクし
ていく。その後の構成は「第一章テキスト
空間の再編成―『柳田国男全集』の試み」
から「第三章柳田国男と写真―「自然主
義」と「重ね撮り写真」の方法意識」まで
が前半部、「第四章歴史社会学の方法と実

踐」から「第六章近代日本民俗学史のため」が後半部となる。

大雑把に言えば前半が『柳田国男全集』(以下、『全集』と略記)の編集委員として著者がいかに『定本柳田国男集』(以下、『定本』と略記)を乗り越え、「テクストとしての柳田国男」へと「読み」を解放していくのか、その方法の提示とまたそれに基

づく実践、となる。後半部はそうした「読み」を踏まえ、後半部はそうした「読み」を武器に柳田国男のテクストを読み解

き、従来の柳田民俗学像の解体と脱構築を図り、その勢いをもってして日本民俗学史の新たな構築を目指す実践として位置づけしうる。柳田のテクストにこれまでまとわりついていた「常民」や「伝承」「固有信仰」といった呪縛を切断し、あるいは「農政学」「方言研究」「口承文芸」といったジャンルの囲い込みから解き放つその努力をこそ、本書から読み取るべきなのだ。

あとがきで著者自身が述べているように、『全集』の編集が「読書空間論以後の私にとって、まことに大きな変化」だった

のであり、その成果として本書は位置づけられなければならない。『定本』という、暗黙のうちにこれまで柳田の読みを束縛していたテクストのあり方を開かれたものへと解き放つ著者の格闘は、柳田の読みをより一層たしかめ、そして緻密でありつつ広がりのあるものへと導いていったのだ。

三 八〇年代後半からの「民俗学の刷新運動」として

著者のよって立つ立場には現在に至るまでの間、一点のぶれもない、と冒頭で記した。ここで改めて八〇年代後半からの「民俗学の刷新運動」を補助線として、本書を振り返ろう。

この点については第五章で、若干の言及がある。著者らによる「都市のフォークロアの会」のメンバーが、「一九八七年の第三九回日本民俗学年会へのいわば「殴りこみ報告」をしたこと、国立歴史民俗博物館での共同研究「民俗誌の記述についての基礎的研究」に参加し、あるいは日本口

承文芸学会研究大会シンポジウムの予稿集「口承」研究の「現在」、(「口承」研究の地平)を生み出したこと、などが当時の出来事として言及されている(二八八―二九〇頁)。「民俗学の刷新運動」のまさに当事者として著者がいたことが、ここから伝わってこよう。

ここで取り上げたいのは、著者による柳田国男の「読み」の刷新がすでにこの時点で一定程度、達成されており、問題意識として同時代にある程度、共有されていたということだ。たとえば本書では「郷土研究」という言葉のもとで組織されようとしていた認識の実践の一つとして、こう述べている。「資料や観察における批判力・共有を、雑誌というメディアの広場への参加を通じて構築しようとした理想もまた、郷土研究が主体にわりあてた実践として、民俗学運動の可能性に重要な役割を果たす」(傍点原文)という(二六五頁)。

柳田が重視した問いや批判力を共有するための雑誌という「場」への着目は、たとえば大月隆寛の次のような一文にも共通す

る。「柳田国男は「問答」に執着した思想家である。より正確には、「問答」という形式に、といふべきかもしれない。「そのような相互的なやりとりが可能になる「場」の論理に着目していた」のであり、「問いかけ」に対する「応答」という形での交通が、雑誌というメディアを媒介にして成立する」といふ仮説が、初期の柳田の方法を支持していた」と述べているような箇所だ。「大月 一九九七 五二」。たとえば歴史社会学の方法という問題意識へと志向することはなかつたものの、大月による柳田の読みは佐藤の理解と共鳴する。

「認識の生産過程の総体を包含」しているのが佐藤にとつての「方法」の領域であり、だからこそ具体的に個別的な実践に寄り添う必要があるという(三二二三頁)。そこから地方の民俗学者の実践が、民俗学史の再構築作業の一環として取り上げられていく。本書第六章で取り上げられているように新潟県の青木重孝、大阪民俗談話会の澤田四郎作といった地方にある民俗学者への注目と民俗学史の再構築も、八〇年代後半か

らの「民俗学の刷新運動」での主要なテーマであった。

著者にとつてその民俗学史は、どのように描き出されるべきなのか。たとえば「民俗学史に向かい合う想像力には」「その論考の文字以前に埋もれてしまった実践を読み解き、その認識が生産された場を追体験しつづつ考えるような、積極性をもめられる」(三二四頁)ものだという。冒頭で紹介したように神戸在住の赤松啓介を招いたシンポジウムは、大月らが主催していた一九八九年四月に開催。その大月による赤松論のタイトルは「まるごと」の可能性「大月 一九九七」だ。佐藤にしても大月にしても、「まるごと」の可能性の位相において民俗学史を読み解こうとする姿勢で立場を共にしている。こうした立ち位置からさらに柳田の精緻な読みを踏まえた具体的な成果として、本書第六章は位置づけられるのだ。

国立歴史民俗博物館(当時)の橋本裕之が研究代表となった「民俗誌の記述についての基礎研究」は、著者も参加して

一九八九年度から九一年度にかけて実施された。この共同研究で、著者は柳田の講演「海上生活の話」のテープ起こし原稿の復元を行っている「佐藤 一九九二」。これは長野県在住の箱山貴太郎が直接テープから起こしたもので、柳田自身が訂正補筆削除をした原稿をもとにした作業だ。著者はこの原稿用紙に記された文字から、書き込みによる「いくつかの積み重なる文字によって作られた「地層」を、字体や筆記具から五つほど見出し、丹念に読み解いた上で作業を進めている。「柳田国男の歴史社会学」では『定本』という形での正典化による問題点が何度となく指摘され、たとえばテキストそれ自身の持つ歴史性が正典化によって固定化されてしまい、ひるがえって再検討する運動が抑制されることを挙げる(二七八頁)。「海上生活の話」の復元作業は、地方の民俗学者への着目だけではなく、後のこうした指摘につながってゆかないわば原体験としても位置付けられるのではないか。

改めて確認しておこう。『柳田国男の歴

史社会学』は、八〇年代後半からの「民俗学の刷新運動」を『全集』編集の経験を踏まえてさらに先へと進めた、そのまざれもない正当な成果なのだ、と。

四 最後に

お約束として、最後に本書の「難」をひとつ。

それは『全集』編集で著者が遺憾なく發揮させている書誌学的徹底が、本書ではいかにも不十分なことだ。あとがきには著者の博士論文『柳田国男における歴史社会学の方法』と本書は別だとあるが、内容の異同について若干でも解説が必要だったのではないか。東京大学の学位論文データベースに要旨が掲載されていて、ある程度見当はつくが構成の詳細までは明らかではなく、対比のしようがない。また「続・読書空間の近代」と副題で謳いながら、『読書空間の近代』という書物の形態を何よりも特徴付けていたページ欄外の見出しの柱が、本書にはない。表紙のデザインにして

もそうだ。この二冊を並べても、なんらの統一性、連続性が感じられない。

それにしても。本書に幾度となく出てくる「念願」あるいは「本願」という言葉に、不意打ちのように心打たれる。たとえば「柳田国男の学問構想のともとの念願の発掘と復権」（二〇〇頁）、「民俗学という学問が何を願ったのかという、いわば「本願」の描き出し」（二七四頁）、「民俗学史の本願」（二九一頁）といった具合だ。佐藤は同じく都市のフォークロアの会のメンバーだった小川徹太郎の遺稿集の解説で、「学問に期待し、その力に希望を見出そうとする、姿勢や立ち位置そのものにおいて」小川はアカデミックだ、と述べている（佐藤 二〇〇六 三三八）。本書『柳田国男の歴史社会学』も、その意味でアカデミックすぎるほど、アカデミックだ。その姿勢に、一読者として思わず居住まいを正さずにはいられない。

『読書空間の近代』が刊行された当時、まだ筆者・矢野は駆け出しの院生でしかなかった。この書を開いても、柳田からなせ

いきなりミヒヤエル・エンデなのか、ただ戸惑ったことを覚えている。にもかかわらず、この書は読まなければならない一冊として周囲では受け止められていた。院生時代の恩師、宮田登先生も『読書空間の近代』を契機として著者を筑波大での講演会に招いたことを覚えている。民俗学や口承文芸研究の周囲には、どこか高揚した熱気が漂っていた時代である。だが三〇年近い時を隔てた今、こうした熱気は皆目、ない。少なくとも私には、そう思えてならない。『柳田国男の歴史社会学』は、だからこそ「孤高の書」になりにかねないことを危惧する。見失われた「本願」をこの手に取り戻す、そのためなくてはならぬツールとして本書を使いこなしていかなければならぬまい。

注

(一) その意味で本書は、同じく『全集』の編集者である石井正己の仕事、たとえばほぼ同時期に刊行された『テクストとしての柳田国男 知の巨人

の誕生』〔石井 二〇一五〕他の著作と共鳴しており、石井の著作も併せ読むべきである。

(2) この報告について「どこか楽しかった高揚とやりどころがない空振りぶり」とだけしか本書にはない当時への言及は、同じ報告者の一人だった小川徹太郎の遺稿集への「解説」でより具体的に、そしてどこかパステイックなトーンで記されている

〔佐藤 二〇〇六〕。

(3) <http://gazo.dl.ic.u-tokyo.ac.jp/gakui/cgi-bin/gazo.cgi?no=216214>

参考文献

飯倉義之 二〇一三「都市伝説が「コンテナツ」になるまで―「都市伝説」の一八九八―二〇二一」『口承文芸研究』第三六号

石井正己 二〇一五『テキストとしての柳

田国男 知の巨人の誕生』三弥井書店

大月隆寛 一九九七『顔あげて現場へ往け』青弓社

佐藤健二 一九九一「解題および講演の復

元」『国立歴史民俗博物館研究報告』第

三四集

佐藤健二 二〇〇六「解説」小川徹太郎

書評

佐藤健二著

『柳田国男の歴史社会学

続・読書空間の近代』

川村 清志

はじめに

「読む」という行為の途方もなさを教えてくれたのは、たぶん、佐藤健二である。

「読む」こととは、単に書かれた内容を理解するだけではない。意味のわからない術語や人名を確認し、引用される論文や本を後づけし、著者の意図を推し量つても十分ではない。全一的にみえるテキストの

読みをずらし、本というメディアの自明にして秘められた断層を、佐藤は「読者」に突きつける。佐藤は本のそこに配置された著者の意図、意志、戦略、戦術を読み取り、さらに、それとは「異なる読み」と

「異なる本」の可能性までも幻視しながら、テキストの地平を踏査しようとする。

かつての私は、その底知れないテキストの迷宮からは、逃げた。正直いえば、今も逃げたい気分ではいっばいである。この依

『越境と抵抗』新評論

二〇一五年二月

せりか書房刊
本体三八〇〇円

(やの・けいいち/静岡大学)